

自然主義の彼方へ 原 子 朗

萩原朔太郎における自然主義の影響を指摘したのは三好達治である（『萩原朔太郎』）。朔太郎が、なによりもロマンチストの詩人とされているだけに、そして終始自然主義に毒づき、「詩の原理」をはじめ彼の主要なエッセイで「自然主義は詩の讐敵であり、詩的精神の虐殺者である」と、例の調子で繰返しているだけに、この三好の指摘は、かなり刺激的であった。

その三好説については、やはり刺激をうけた一人である大岡信氏が、その著『蕩児の家系』の中で手ぎわよく要約し所見を加えている（『萩原と西脇——現代詩と自然主義』）のでここで詳しくはいわないが、二三私見をつけ加えると、「そもそも口語詩の誕生そのものが、自然主義文学圏内の一波頭であった」といった三好説には、私はにわかには同じ得ない。これは、しかし、ひとり三好にかぎらず、日本の口語詩運動と自

然主義とを癒着、短絡させて考える思考は、今や詩史的通説とさえなっているといえそうだ。たとえば大岡氏にしても、この三好説を受けて「もともと口語自由詩なるものが、明治末期の自然主義文学の一翼として誕生したものであり、朔太郎はそれに最初の結晶的フォルムを与えた……」というふう

に、やはりいつている。
私は他の場所でも詳説（詳し）したことが、それでは明治四十年の口語自由詩の最初の成功作とされている川路柳虹の「塵溜だめ」にしても、自然主義の影響によるもの——とされても無理もあるまい。柳虹自身、後には当時の自然主義に「誘引されて」口語自由詩を書いたというふうにはいるが（『詩学』）、たしかに当時鬱勃として興りつつあった自然主義的な風潮、ないしは思潮が、十九歳の京都の画学生柳虹を刺激し、「誘引」しなかったとはいきれないにしても、直接に

自然主義の理論によって「塵溜」が生れたとするのは早断である。東京の文学青年たちにすら、まだ自然主義の理論は、実作を動かすほどにはよくのみこめてはいなかった、いわば曖昧模糊たる当時だったのである。

端折って結論的にいえば、いわゆる口語自由詩運動は、日本の自然主義運動と雁行し、理論的には後者に誘引、誘発されはするものの、本質的には明治二十年代の言文一致運動の後をうけて、その詩における試み（山田美妙ら、また俗謡、訳詩等における試み）を内蔵しつつ、漸く明治四十年代に入って本格的な、普遍的な趨勢となつて現われて来た運動なのである。けつしてそれは単に「自然主義文学圈内の一波頭」や「自然主義文学の一翼として誕生したもの」ではない。別のいいかたをすれば、古典的な文語（雅文・雅語）による芸術的な詩表現の可能性は、泣菫、有明をもって、その極限に來ていたのである。

ところで三好達治は、もともと自然主義精神の浸潤を受けた朔太郎の本質が、この口語詩体の本質と契合して、いちだんと自然主義的精神は朔太郎に支配的なものとして、はたらいている、というふうにいるのだが、その朔太郎の本質とは、三好によれば「權威と慣習への蔑視、反抗、揶揄ないしは戲謔、それらをひつくるめての現実生活への回向」、「手取り早くいへば甚だ簡卒に実人生的な傾向」、あるいは「彼の好尚と作品との中軸をなして貫通する、一種実人生的な風流

気の乏しい詩感」ということになる。

しかし、こうした朔太郎の本質的な諸傾向の指摘も、それはそれとして認めるとしても、それらをいきなり「自然主義」に結びつけてしまうのも、どうかと思われる。いささか常識的にすぎはしないか。たしかに三好達治は、おおむね「私の考へでは」と断わり、例の三好流の、もつて廻つたような口調（饒舌的な簡潔さ）で「手取り早くいへば」とか「平たく略していへばそれ位のところ落ちつくことになるだろう。」と繰返しているのだから、批判するほうが窮屈に考えすぎるのかもしれない。だが、朔太郎と自然主義との結びつきをいうこの三好説は、最初にいったように刺激的というだけでなく、『萩原朔太郎』一巻の中心主題をなしているだけに、そう「平たく」ばかりも取っておれないのである。

あえていえば、「自然主義」の影響というより、日本独自の自然主義を發明したほどの、明治末期の時代思潮の影響、というべきだろう。うるさくいえば、朔太郎は、いわゆる「日本自然主義」の文学理論とは、直接無縁の存在である。しかし、そうした理論を生み出していった、根は浪漫的な時代精神、ないしは時代思潮とは無縁であるはずはない。それこそ激しく誘引され、浸潤を受け、その個性様式は微妙に時代のそれと重なる。時代に卓越するいかなる天才も、かえってその時代の様式の支配を、潜在的にしる免れることはできないのである。

おそらく三好達治の朔太郎論の真意も、そこらに在ったろうと私には思われるのだが、しかし次のような三好のエピソードを交えての論証は、素朴な読者を説得することはできても、それだけに、以上の真意を単直に枉げてしまうことになりかねない。「風景などには、僕はいつかう興味がない」といって『詩の原理』（昭和三年）執筆の頃は、カメラを携えて町をほつつき歩いて、朔太郎の興味の対象は「貧弱な工場の一隅や、ごみごみとしたガード下や、おしめの黴る貧しい家並や、傾きかかった煙突などのやうな、——後にはある種の芸術写真家たちが好んで取材したやうな、さういふ種類の何かしら貧しげな畸型な或は唐突な不美なものばかりに限つてゐた。花卉も樹木も美しい風景も、あの人にはいつかう興味がなかつた。」と三好は思い出ふうに朔太郎の好みを語り、「かういふ実生活上の偏よりと、文学上に於ける好尚とが、符節を合するやうに本質的に一致してゐた」というのである。この場合も、私たちは三好の觀察をそのまま認めてよいのだが、これをそのまま自然主義の傾向、ないしは影響とだけ見てしまうのは、やはり単純すぎるといえまいか。

生まれ身の朔太郎を知らず、エピソードも持たない人間は、彼の作品やエッセイから推すよりはかはないわけだが、そのかぎりでは、「風景などには、僕はいつかう興味がない」という述懐には、「故郷喪失者」をもつて自任する朔太郎独得の心意が感じられる。「けだし日本の異邦人である私等に

は、初めから「故郷」といふ觀念がないのである。国定忠治の昔からして、私等の血統は漂泊者であり、草鞋をはいて諸国を放浪する無宿者であつた。私の同郷の善き詩人が、すべて皆心の家郷を持たないところの、コスモポリタンの漂泊者であつたのは当然である。」（異邦人としての郷土詩人——大手拓次について）「地方的の伝統文化といふものが少しもない」「荒寥とした自然」の中に育つて「風流とか雅趣とかいふ、文化情操そのものを知らない」自分（我が故郷を語る）を語る朔太郎の口ぶりには、いつもの誇張と思ひ入れがありはするものの、三好のいう「一種実人生的な風流気の乏しい詩感」の由来を明かしている点では真率な実感がある。時代の様式とともに、こうした環境風土の詩人に及ぼす精神性の必然を、三好説にかぶせて理解するとき、あながちにその実生活上の偏よりを「自然主義」の血縁ゆえと解してしまふわけにはいかないのである。

私はここで折角の三好説を覆そうとするのではないが、大雑把な文学史的概念で、複雑多様な個性や時代思潮の内面をくくってしまうことの便利さに、つい私たちは馴らされてしまつていてのではないか、という自省をこめて以上私見をつけ加えてみたのである。考えてみれば××主義とか……派といった概念くらい便利なものはないのである。

大岡信氏は前掲論文の中で、西脇順三郎氏が詩的自伝として書いた「脳髓の日記」（『西脇順三郎全詩集』あとがき）の一節

を取上げて、西脇氏がその中で、かつて詩を「雅文調で書かなくともいいものであるということ」を教えてもらった先生は萩原朔太郎であった。ただ言語の問題ばかりでなく朔太郎の自然主義を全面的に支持した。」とあるくだりの、この「朔太郎の自然主義」というところが、とりわけ示唆的であるとも述べているが、およそ常識的な概念などで物を考える脳髓の持主ではないとされている西脇氏にしながら「朔太郎の自然主義」なのである。そのことに私は注意したい。

朔太郎と自然主義との関連——私の場合それは朔太郎と時代思潮との関連、ということに問題はひろがってくるわけだが——については、朔太郎自身に彼の自然主義観を覗かせたエッセイも多いことゆえ、それらを取上げて論じてみたい意欲を私は禁じ得ないのだが、ここはその場所でもないのので他にゆずって、ここでの本題にはいることにしてみたい。

すでにいったように、（かりに三好説をそのまま素直に受け入れるとしても）朔太郎における「自然主義」の浸潤は、けっして直接的なものであるはずはない。あくまで間接的な、客観的な時代の影響であつただろう。少なくともある時期を時の「自然主義」の潮流を全身で受けとめて過ごしたという形跡は、朔太郎にはない。その点ではむしろ彼の兄事した北原白秋のほうが、少なくとも位置的には自然主義に甚だ近い場所、青年期の一時期を過ごしているわけである。その渦中にこそ巻きこまれることはなかったが、そして影響という

ほどのものもみとめられないにしても、白秋は折からの自然主義の「本山」の感のあつた早稲田大学に在学し、まのあたりに「自然主義」の推移を見たわけだから。

白秋にその影響はみとめられない——と私はいったが、これもはたしてそういつてよいものかどうか、「自然主義」を狭く固定的に考えずに、本質的にロマンチックな文学運動であつたと考えれば、そして非自然主義的な「パンの会」も自然主義の延長線上に興つた一つの芸術運動であつたことを考え合わせれば、少なくとも論理的には、朔太郎よりも白秋のほうがネガチヴな間接的な自然主義の影響という点では明確である、と考えることも可能である。また、同じ象徴詩でも、たとえば『有明集』と『邪宗門』のちがいを考えると、白秋における「自然主義」的なものも問題になつて来よう。ともあれ、作品から受ける印象だけで異質のものからの影響の有無を量りおおせるものではない。

大手拓次のよく知られている作品（といえは長い間彼の詩は主として詩集『藍色の臺』（アルス刊）一巻によつて知られてきたわけだが）から、誰もこの詩人が「自然主義」を全身的に受けとめていたということを感じ得るひとはいないだろう。事実、もっとも非自然主義的な、耽美的で幻想的な詩人として、特異な眼でその作品は見られてきた。ただし、彼ほど「自然主義」の洗礼をまともに受けていながら、しかも最も自然主義から遠い詩人と思われている例は、そしてたし

かに自然主義の彼方へつきぬけていった例は、めずらしいの
ではあるまいか。その点、一歳年長の朔太郎とも、また二歳
上の白秋ともはつきりちがって、拓次の場合は直接的な「自
然主義」との接触のあとを、習作期の詩文や日記（白鳳社
『大手拓次全集』第四、五巻）によって私たちはたどることがで
きるのである。

ここでは、拓次の早稲田大学在学時の六年間（高等予科一
年、学部五年）本当は三年間ですむところを落第のため一年
級と二年級をそれぞれ二回やった）、なかんづくボードレー
ルとの出会い（そして彼にとっては画期的な論文「私の象徴
詩論」（卒論）が書かれるわけだが）以前の八模索期Vとも
いうべき、すなわち早大時代の前半期に焦点をおいて、一人
の詩人が「自然主義」をいかに通過していったかを見てみた
い。そしてそこから何を学び、しかも後の象徴詩にそれはい
かなる作用を及ぼしているか。（ここで断わるまでもないと思
うが、私が「自然主義」と括弧つきで呼んでいるのは、主
として日本における自然主義をさしてのことである。）

病気のため高崎中学を一年遅れて卒業した拓次は、一時は
あきらめかけた大学進学が叶えられて、明治三十九年十月に
早稲田大学第三高等予科に入学した（一度は入試に失敗し、
二次試験でパスしたため、二次合格者は一月遅れて十月入
学）。当時の予科は旧制で一年間、第三高等予科とは文学部
予科をそう称した。下宿は最初、穴八幡下（下戸塚、今の戸

塚一丁目）の清致館であったが、四か月後にはすぐ近くの馬
場下町の千代田館にかわっている。いずれも大学まで歩いて
五分ほどの至近距離である。この下宿の近さ、ということは
当時としてはごく普通のこと、なんということはないさう
だが、人一倍人づき合いの悪い孤独癖の強い拓次が、日記に
明らかなように入学一、二年目は実によく大学の図書館に通
い、下宿で夕食をとってからも夜遅くまで図書館にこもると
いった、およそこんにちの学生には見られない熱心さと猛烈
な読書量を示すのも、この下宿が近いという生活の便利さを
考慮に入れるべきだろう。それはまた彼の内向性と孤独癖を
助長することにもなるわけだが、唯一の彼の社会性（？）で
ある美少年への傾倒は、かえって昂まる。中学時代からの彼
の思慕の対象であったK・T君、T・H君、T・T君、K・
T君らに加えて、早速新しい、Brother: M・太田君が日記
に新しく登場することになる。彼は同じ文科生であったが、
この熱心な図書館通いがとりもつ縁であった。中学時代患っ
た中耳炎、つづいての脳炎の後遺と思われる年来の頭痛持ち
である拓次は、正規の授業にはそれほど興味を示さないが、
それでも予習、復習は欠かしていない。そして余力のすべて
は読書と詩作に費やされているといつてよい。あるいは眼
想、幻想、美少年たちへの思慕。

ここでいわれる美少年愛Vについて、ついでに一言してお
きたい。概念的にいえば、彼のもホモ・セクシュアリティに

ちがいないが、通俗的な興味の対象になるほどの内容は、いずれの場合もなかった。いわば純情可憐な、プラトニックなものであった。彼の極度の含羞癖、羞恥心の過多が、そして潔癖な倫理的心情が彼をそうさせた、ともいえるわけだが、後年何人かの女性たちに対しても、やはり彼は熱烈にそうであった。この年、明治四十年一月八日の日記に「僕は女性は徹頭徹尾絶対的に大嫌ひだ。大嫌ひだ」とあり、欄外にまた「女性は見るとも嫌ひだ。my lover is not beautiful girl, but my lover is handsome boy.」とあったり、同年八月三日には「僕は『死』といふ者は之只果敢なき人の避け得べからざる運命である、悲しくはない。僕は好きな本を読みつくし、又相思の恋人と一度でも恋にあこがれて見たい。之だけが僕の大欲だ。(但し恋人は少年なる事)女は嫌ひ、又一つあった。せめて日本中なりとも名勝を見たい。」と記してあって、そこだけ見ると、根っからの「女嫌ひ」のように見えるが、その間の四月二日には「今日初めて女性に対する愛のかげをみとめた……」という記事がぼつんと一行あったり、またこれは後年の詩や日記にむなしくも賑やかに、執拗に示される女性たちへの秘かな彼の傾倒ぶりからもわかるように、彼の「女嫌ひ」は決して本質的な、倒錯的なものではなかった。女性への関心が昂まってくると彼の少年愛Vは影をひそめるのである。

ただ、ここで暗示的にいえることは、彼の純情可憐な少年

年愛Vは、彼には無意味にせよ、ある形而上的な意味合いをもつということである。それはさきの日記引用の二番目(八月三日)にある程度示されているように「死」といふもの」につながってくる。端的にいってしまえば「死への信仰、あるいは愛」、それが彼の少年愛Vの核心ではなかったろうか。

「自然」「詩」「愛」僕の生命も之、僕の希望も之、僕の楽も之、我にして若し詩に生きなければ……」明40・8・24)

こんな記録は彼の日記の随所に見られるのだが、ウブな文学青年らしい、なんと感傷的な、とわらうこともできよう。だが孤独で疴弱だった拓次にとって、年来詩Vだけが生きる支えだった。才能や功名心にもとづく文学志望では決してなかった。つまり詩Vと少年愛Vは彼において殆んど同義だった。そしてそれは静かな狂気のかたちをとって「死」といふもの」につながるのである。みずから「僕は多情だから」といい、つきからつきと「handsome boy」に心をひかれて傾倒し、妄想し、幻想するが、それは決して多情ゆえではなかった。ちがった相手への傾倒が互に刺激しあい、連鎖的に執着の度合いを高めてゆく。その執着は、だからいつも一つの対象に向っていたといつてよい。それが「多情」の真の意義かもしれないが、相手は複数でも、拓次自身にとつては一人だった。なんのことはない、ありふれたことばでいえば、それはミューズ、ということになるわけだが、やがて

数年後には噴出する日本近代詩に稀な彼の特異の詩は、こうした狂気ないしは信仰の、長い持続のリズムであったといえるだろう。

そのことは稿を改めて論ずることになるが、ここで暗示的に彼の少年愛について触れておいたのは、一つには、こうした素地を既にもつ個性が、折からの「自然主義」にふれたということ、二つには、しかもその個性なりの受けとりかたを許す、「自然主義」は融通性のある、必ずしも固定的ではない、いかなれば包容力豊かな、それだけ軟弱な、近代日本の一つの時代思潮ではなかったか、ということを先づもっていったからにはかならない。「自然主義」を何かしら固定的に、定義定論的にくくってしまう文学史的思考のマンネリズムに私が本稿の最初あたりで疑義をつらねたのも、そんな意味あいからであった。

さて、拓次の早大入学後の旺盛な読書傾向についてだが、これも全集第五巻の日記を見てもらえば明らかなおりでである。後年、といっても明治四十三年からの、ボードレルを中心としたフランス詩関係の圧倒的な原書渉猟については稿を改めて触れるとして、ここではそれ以前の彼の読書教養について触れると、入学早々『名所和歌補習抄』『江戸の落語』『新詩辞典』『源氏物語』『玉蟲』（御伽草子『玉蟲の草紙』か）『花屋日記』（芭蕉『終焉日記』）などを図書館で読むことが日記から拾える。翌四十年は一月十三日に藤村の新刊処女短

篇小説集『緑葉集』を早速同文館で購ひ、翌十四日は「初めて昇校し」「例の通り図書館で帝國文庫の『氣質全集』を見た」とあるのにはじまって、甚だ旺盛な読書渉猟がなされている。どの程度味読したかは別として、多い日には一日三、四冊延べ平均一日一冊程度にもなるうか。

紅葉、露伴、藤村、花袋等々の新刊本をはじめ、雑誌は「新小説」「新古文林」「早稲田文学」「帝國文学」「新思潮」「詩人」「ホトトギス」「新声」「趣味」「新人」などが購入、あるいは図書館によって愛読されている。古典は竹取、伊勢、源氏、枕草子にはじまって、決して系統的に時代順になどというのではないが、平家物語、謡曲から西鶴、馬琴、近松、京伝の諸作に及び、古今、新古今はいうまでもなく、山家集等の古典和歌にも親しみ（拓次にはこの時期に短歌の偶作もあることをここで付け加えておく。全集第五巻「雑纂」部参照）また佐佐木信綱主宰の竹柏会の機関誌「心の花」も見、金子薫園の『和歌入門』の御蔭で和歌の真意が解りかけ（明40、5、13）たり、「今日図書館で薫園の和歌入門を読んだ。大に得る所あり。僕はどうしても俳趣味にとぼしい。歌が好きだ。」（同、13日）と記し、「はづかしいが生れてはじめて」作った歌「夕月夜小田の蛙の声たえぬ旅僧一人西に行きつゝ」が同日の日記に見えたりする。俳趣味に乏しいといながら、俳諧書も多く漁っていて、芭蕉や鬼貫全集、蕪村をはじめ『俳諧自在』『俳諧漫話』といった本も読み、実作は示さ

れていないが「俳句など作る」(同、7、21日)と日記には見える。

外国文学関係では『ダンテ神曲物語』とか『失楽園註解』、誰のかはっきりしないが『幸福論』の訳、『パラダイスロス』、『英国七大家文集』『アラビアンナイト』等々。また貸本屋も下宿に出入りして、『田舎妻』前後二冊とか、桜癡居士の『思ひ思ひ』等を借りて読むといった記事があって、講談本や通俗小説にも興味を示している。

以上はすべて明治三十九、四十年の拓次の日記から拾って見たのだが、おもしろいのは『野外植物研究』とか『鳴く蟲の研究』を図書館で読むといった記事が見え(9月16日、17日)今後の勉強の方針として多くの方面を列挙しながら(たとえば男女の顔面容姿の研究、家屋、衣服、履物、人殺し、自然の研究等をあげて)、「自然美の研究」として「山川草木鳥獸……等」の研究を強調していることである。「詩的材料と小説材料を区別して帖面に書く事」そして「要するに詩を主とし小説を副」として、苦手の自然科学の勉強も詩のためならば敢てやろうとし、ある程度それを実行しているわけである(40、6、22、日記参照)。

明治四十一年以降の日記の記述は大学卒業(明45)まで、あまり熱心でなく、現存する四十一年、四十三年、四十四年の日記帳(四十二、四十五年はあったものと思われるが桜井作次氏の手許にはない。)は拓次にとって非常に重要な時期にもかかわら

ず、記述に繁閑の落差甚だしく、しかも内面的な感想が主で、具体的な記録、たとえば読書遍歴の実態は読みとれない。しかし(註3)かしま私に前にもいったように、この日記記述の繁閑自体が拓次の内面の成長を物語っているともいえよう。日記の空白は、それだけ実作活動や日記以外のものに向けられた時間の多さを物語っていると、拓次の場合はいえるからである。

たとえば河井醉者主宰の詩誌「詩人」に筆名・紅子で詩を投稿しはじめるのは明治四十年だが(彼の詩がはじめて活字になったのがこの年八月発行の「詩人」第三号に載った文語詩「昔の恋」(全集第四卷「初期詩篇」冒頭作品)華泉とも号して多くの詩の習作、散文小品、小説、戯曲の試作が、年を追って賑やかになる。これらは同じく全集第四卷と第五卷の「雑纂」中に見られるとおりだが、それだけ日記の内容は簡略ないしは過疎の度合を増しているといえる。そして読書傾向にしても、おそらく四十年に見られるとおりの旺盛さが、ずっと持続されたと見て間違いない。しかもその内容は、年々より高度な、専門的な水準に高まり、意識的な態度になっていったことも、残されている蔵書によって明らかである。前にいったように、明治四十三年あたりからフランス語による原書中心に読書傾向は集中されてくる。

むろん、それらは一々日記に記載されていないし、またこれもそうだが、ここに「詩論」と銘うった一冊の切抜帳がある。約八百ページの本仕立てのもの。海老茶の厚表紙が施さ

れて背表紙上段に箔押金一号活字で「詩論」とあり、下段に三号活字で「第一編」とある。拓次が各雑誌の詩論を切抜いたものを、後に製本屋に出したものである。内容は明治四十一年六月号の「早稲田文学」所載の櫻井天壇「独逸の抒情詩に於ける印象的自然主義」にはじまり、明治四十四年十一月の所載誌未詳の（調査中につき追って明らかにしたい。年月は拓次手記のもの）前田夕暮「卓上語」に終っている。「早稲田文学」「帝國文学」「新古文林」「秀才文壇」「世界文芸」等の諸雑誌から切抜いた約百点の詩論や海外詩紹介、詩壇時評等々の発表年月順の編纂というわけである。おりおり新聞の詩壇時評の切抜きも貼り込まれている。「第一編」と銘打ってあるからには、つきつぎに切抜かれてたまってゆく主要論文を、この方法で「第二編」「第三編」と続ける意図があったものと思われるが、現存するものは「第一編」のみである。しかし、この「切抜本」は拓次の詩壇時流への関心と、勉強ぶりを証拠立てて余りあるものといえよう。明治四十一年から四十四年までの、私たちがこんにち貴重とする詩論はここに網羅されており、間々、拓次の書込みや朱線が施されているのである。

さて、こうした拓次の二十代初頭の読書遍歴は何を物語っているか。後年、萩原朔太郎は室生犀星と一緒に拓次の下宿を訪ねている。その時の模様をアルス刊『藍色の墓』の跋文に書いていうには、拓次は「仏蘭西の詩、ボードレーールとサ

マンより外、少しも読んで居ませんから。」と二人にいったとある。最初は「尊大なベタンチックな奴」と思ったが、拓次の含羞を見て「すつかりこの人の詩人的天質が了解された」と朔太郎は書いている。そして朔太郎は拓次が「仏蘭西の書物以外に、日本語の本を殆ど読んで居ない」こと、そして彼が白秋以外の「他の如何なる日本の詩人の存在さへも全く知らずにあること」を拓次の重要な一面として強調している。

朔太郎一流の思い入れ躍如たるものがあるわけだが、拓次がほんとうに二人にそういい、そう思わせたすとすれば、それは明らかに拓次の韜晦、あるいは正に含羞、そう、はじめて会った二人の詩人に対する極度の羞恥心によるものであって、事実と距たること甚しいといわねばならない。ついでにこだわってというと、朔太郎跋文は拓次の部屋の書架に「仏蘭西語の詩集や雑誌がぎつちり積まれて居た。」と描写するが日本語の詩集や雑誌もそれに劣らず積まれていたのには、気がつかなかったのだろうか。明治四十年三月一日の拓次の日記に「源氏物語のある博文館の文学全集の九、十、十一（巻）を求めた」りする記述があるが、学生時代から拓次の買い求めた日本の古典や当時評判の文学作品の単行本や全集、雑誌等ばかりの数のにのぼる。朔太郎や犀星が彼の下宿を訪ねたのは、拓次が大学を出て四年目にライオン歯磨本舗広告部に就職してからであり（朔太郎跋文は「一九三五・八・二〇」日付のもので「今から約二十年近くも昔のこと」「牛込の下宿屋」とあるの

で、そう推定できる^(注4)、現存する拓次の蔵書から推しても（かなり散送しているが）当時「几帳面に整理されてた」拓次の書架なり、その周辺には「日本語の本」もかなりあった筈である。蔵書の中でも圧倒的に多いフランスの仮綴本に無学な二人の詩人は感圧されたのだろうか（朔太郎という詩人は「無学が強味だ」といったのは日夏耿之介氏である）。そのため他の本は目に入らなかつたのかも知れない。これまたついでながら、犀星が終生拓次に対して黙殺ないし無関心を粧うのは、拓次に無視された（それは拓次の羞恥心と美男好みによる）ということもあるが、この初対面のおりに拓次のこうした意外に教養的な一面を見て、それらしい、ことさら自分とは異質の世界の人間だという犀星の決めこみの作用があったからではあるまいか。私はそう見る。

また、朔太郎のいう、白秋以外のいかなる詩人の名も拓次は知らなかった……という真赤な嘘も、既に先ほど紹介した「切抜本」一本でも見破れるわけだが、これもついでにここでいっておくと、明治四十年十二月十八日に書いた日記が、当日欄ではなく日記帳の巻末「備忘録」欄四ページを埋めていて、ここで拓次は一年間の詩壇の回顧を試みている。抱月、有明、泡鳴、泣菫、酔茗、花外、寛、夜雨、介春、露風、東明、御風、といった詩人たちへの簡勁な、辛辣な批評である。これなどは詩壇時評の切抜きなどちがって甚だ主體的な、強い拓次の詩壇への関心を、つとに示す好例といえ

るだろう。どうして拓次が時流に「風馬牛に無関心」だった、などといえよう。たしかにこれは本格的な詩作期以前のものとはいえ、だからといってまた、後年朔太郎らの目を眩らせた大正期には、もはやそうではなかつたなどと、これもどうしていえるだろう。（未完。「大手拓次研究」第二章、第二部、その一）

(注1) 拙稿「日本近代詩とスタイル」(『文体序説』所収参照)。
(注2) 大手拓次の甥(拓次実弟桜井秀男二男)で拓次の遺稿を保存してきた。

(注3) 拙稿「少年愛の暗室・拓次の起点」(『ユリイカ』一九七〇、一〇月号)参照。

(注4) 伊藤信吉編・萩原朔太郎年譜(新潮社全集第五卷)によれば、朔太郎の拓次訪問は大正三年の「四月頃」となっているが、その根拠はないことを伊藤氏の御了解を得てここに訂正しておく。